

## 死海文書と初期キリスト教 ―はじめに―

アダ・タガー・コヘン

一神教学際研究センターの成果である『一神教学際研究』(*JISMOR*)の今号には、当センターのリサーチフェローによる研究成果および国内外における活動が含まれる。その冒頭部分について紹介したい。

特集および一般論文のパートには、聖書・死海文書研究の専門家であるエルサレム・ヘブライ大学のイマニュエル・トーヴ教授を再びお迎えして、2018年10月6日、同志社大学今出川キャンパスで催されたワークショップにおいて発表された3つの論稿を掲載している。トーヴ教授はかつて2006年に、同志社大学神学部でサバティカル休暇を過ごされた。今回、2006年の時点ではある者は学部生だった *CISMOR* の若手研究者が発表を行い、トーヴ教授からコメントを頂く機会となった。このワークショップで発表された5つの論稿の内、3つが本号に掲載されている。すなわち、特集のパートにおけるトーヴ教授ご自身による基調講演および加藤哲平博士による論稿、そして一般論文のパートにおける大澤耕史博士の論文である<sup>1</sup>。

皮紙の巻物にインクで記された900以上の異なるテキストは、今日、死海西部のユダの荒野で発見されたことが知られており、そのため、「死海文書(*Dead Sea Scrolls*(=*DSS*))」と名付けられた<sup>2</sup>。荒野の乾燥した高温の気候下に保たれ、クムラン(*Qumran*)として知られる遺跡付近の洞窟内の土器に保管されたテキストは、ユダヤ教およびキリスト教の聖書研究の為の豊かな資料を提供するものである。紀元前2世紀から後1世紀までに年代づけられ、ヘブライ語およびアラム語で記されたそれらは、聖書テキストの展開と、その期間において正典テキストへと至った進展の証左である。この豊富なテキストの内に研究者は、聖書の正典的なテキストと、分離された共同体の領域に生活し、マソラー本文(*Masoretic Text* (= *MT*))におけるヘブライ語聖書から知られるものよりも組織だった信条や慣習を、彼らとともにもたらした、あるいは、その領域で書き記した人々に属するテキストとに区別した。

死海文書に関する先述のワークショップから、ここでは2つの論稿に言及する。1つはイマニュエル・トーヴ教授による論稿で、初期キリスト教徒の引用や参照が、ヘブライ語聖書のどの写本に基づいているかについての理解の可能性に関する新しい解釈である。もう1つは加藤哲平博士による論稿で、クムランの書記達

の産物で、正典的なテキストではない、ある特定の写本に関する詳細な議論である。

トーヴ教授の論稿、「死海文書中の聖書：ユダヤ教と初期キリスト教の多様性」(“The Biblical DSS as Representing Variety in Judaism and Early Christianity”)は、ヘブライ語聖書写本の展開の可能性を詳述したものであり、ユダの荒野（ムラバアト(Murabba'at)、ナハル・ヘヴェル(Naḥal Hever)、ナハル・ツェエリーム(Naḥal Se'elim)など)由来のテキストをプロト・マソラー本文(Proto-Masoretic Texts (=Proto-MT))と分類し、その一方で、クムラン由来のもの（死海文書と呼ばれ、様々な表現法を持つもの）を非プロト・マソラー本文と分類した。つまり、トーヴ教授によれば、「クムラン共同体はテキストに対してオープンな姿勢を取るべきと信じていた。それは大衆的なテキストや、マソラー本文の自由な筆写を反映するテキスト（マソラー類似本文）なども含んでいる。その一方で、ユダの荒野の諸共同体は厳密にマソラー本文を保持した」。この主張に関する最も重要な証拠の一部は、異なる遺跡で出土した様々なテフィリン(*Tefillin*)である。トーヴ教授は、「プロト・マソラー本文はさらにタルグミーム(*targumim*)、ユダヤ的ギリシア語諸訳、そしてウルガータ(*Vulgate*)にも反映されている」と指摘している。更に、「プロト・マソラー本文は、クムランの初期の遺跡には残されていない」。ヘブライ語聖書のテキストはパレスチナに源を持ち、そこで発展したという仮定に基づき、トーヴ教授は写本群を2つのグループに分けた。1つは知的エリート層に属するプロト・マソラー本文であり、もう1つは彼が「大衆的(*popular*)」と称するもので、クムランのテキストと類似した、七十人訳聖書(*Septuagint*(=LXX))およびサマリア五書(*Samaritan Pentateuch*(=SP))が含まれる。

次の加藤哲平博士による論稿では、4QMMT（クムランの第四洞窟で発見され、そのタイトルが *Miqsat Ma'ase Ha-Torah* であることを意味する）と名付けられたクムラン由来の特定のテキストが扱われている。このテキストは、クムランの人々によって記され、研究者達に「党派的(*sectarian*)」テキストと見なされた。即ち、クムランに居住した人々に属するものであり、彼らは共同体の生活に関する閉鎖的な一揃いの厳格な法を遵守したが、その法は、紀元70年の神殿の破壊以前のエルサレムにおける祭司のエリート層の法に従うものでも、あるいは破壊後にラビのある者たちによって定められたものでもなかった。加藤博士は、いくつかの断片が異なる古書体を示していることを指摘し、さらにまた、どのような特別な用語もそのテキストの党派的な性格を指し示していないという事実を示しながら、テキスト全体の再構成に疑問を投げかけている。このように彼は、死海文書4QMMTを党派的なテキストとして同定することは疑わしいと結論している。

これらの論稿は双方ともに、クムラン共同体の声を表現するものとしての、また、初期キリスト教への先駆としての、死海文書の現在の研究を垣間見させてくれる。

---

注

- <sup>1</sup> 一般論文のパートに掲載されている、大澤耕史博士による3番目の論稿は、聖書テキストおよび死海文書における祭司アロンの人物像について比較考察を行っている。ワークショップで発表された他の2つの論稿、北村徹博士による“Ezekiel in the Dead Sea Scrolls”、および大澤香博士による“Angels in the Dead Sea Scrolls”は、ほかで発表される予定である。本ワークショップの詳細については *CISMOR VOICE* vol. 28、2-3 頁を参照。  
(<http://www.cismor.jp/jp/series/voice/>)
- <sup>2</sup> IAA による死海文書デジタルライブラリについては、“Leon Levy DSS” (<https://www.deadseascrolls.org.il/explore-the-archive>) を参照。